

銭鍾書「『ラオコーン』を読む」：中国詩における物体表現をめぐって

丁 乙 (東京大学)

---

本論は銭鍾書「『ラオコーン』を読む」(1962)において提示された、中国詩における物体表現をめぐる見解を再考するものである。銭鍾書は生前から中国二十世紀を代表する文学者とされ、また近年、彼の広い学問的思索は中国二十世紀哲学の頂点をなすものと評されるようになった(e.g.『世界哲学史8』2020)。中国の美学・芸術論の近代化において、レッシング『ラオコーン』は重要な参照項であり、特にその文学論との比較による中国詩の再考は、1920年代から60年代に多くの論者の課題となった。銭鍾書は「『ラオコーン』を読む」においてこの書物を批判的に参照し、独自の文学論を展開した。

銭鍾書の立場は次のようである。詩と比べて絵画は空間内の物体を表現することに長けているというレッシングの結論には不足があり、中国詩の中に物体表現に優れている例があるという。本論は、彼の取り上げた例のうち李白の詩の「洞庭湖西に秋月輝き、瀟湘江北に早鴻飛ぶ」という句の考察に焦点を絞り、銭鍾書がいかにレッシングの論を発展させたかを検討する。銭鍾書はこの句が「洞庭湖西」と「瀟湘江北」という遠く離れた二つの場面を同時に語るものでありながら、それらが内容面で相互に呼応している点で、絵画に表現不可能なものであると論じている。彼はこうした文学的表現を一つのパターンと見なし、のちの『管錐編』(1979)においてもこの観点から『詩経』「卷耳」を新たに解釈している。

銭鍾書のこの解釈は、詩画を比較するための具体的な基準を設定した点で独自性がある。レッシングは具体例を重視したが、最終的には理論の根拠を記号論に帰し、具体例の分析を十分活用していない。それに対し、銭鍾書は『ラオコーン』の記号論に基づく結論部のみならず、『イリアス』の場面を具体例として援用する第十三、十四章にも注目する。レッシングのたどり着いた結論、〈色彩、形姿を記号とする絵画は、そうした記号と同じ性質をもつ物体を表現すべきである〉は、必ずしも絵画が色彩、形姿の表現に優れていることを根拠としていない。それに対し、銭鍾書は芸術の色彩や形姿の表現に着目し、それを基準として詩の絵画に対する優位を説いている。また、「物体」に関して、「個別の物体」や「諸物体の関係」の表現について議論を具体化している。こうした分析は『ラオコーン』原典や中国の他の「ラオコーン論」には見られないものである。

これと関連して、錢鍾書の論は詩の構造ではなく、作品効果を重視する点にも特徴がある。例えば上記の李白詩は端正な対句であり、こうした対句表現の（修辞法の分類上の）特徴はこれまでも多く指摘されてきた（e.g. 陳望道『修辞学発凡』、佐藤信夫等『レトリック事典』）。それに対し、錢鍾書は絵画との比較において、李白詩における対句の構造は諸物体を平板に並べるのではなく、相互に干渉しあう錯綜した関係となっていることを述べている。